様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１５４

研究課題名（和文）メディアの転換と記憶の変容―中世英雄叙事文学を対象に―

研究課題名（英文）Media conversion and transfiguration of collective memory in the medieval German heroic epic

研究代表者
山本　潤（Yamamoto, Jun）

首都大学東京・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：５０６１３０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、声の文化の領域において過去の記憶を伝承するメディアであった英雄詩が、書記文芸の伝統との混淆を経てどのように変容していったかを、ドイツ中世英雄叙事詩の諸作品において検証するものである。これは、記憶とメディアの関連性に関する文化史の一側面を、文芸作品に即して実証的に明らかにする試みであり、とりわけ書記化された口誦素材の歴史性の問題、超個人的な記憶を伝承する素材と作品の作者性の問題に関しての考察を主軸とした。そして、同時代の様々な文芸ジャンルのメディア的規範に依拠した、英雄詩素材のアクチュアル化への試みと、それまでの文芸伝統に対し俯瞰的な視線を持った「作者」の立ち位置を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study uses a medieval German heroic epic to explore the transfiguration of oral heroic tales, which are a community’s memory transmitted through media, through the contamination of the tradition of written literature. This is also an attempt to explain the cultural history of the relationship between memory and media with the demonstrative research on these literary works. Specifically, this study interprets whether the historicity of the oral heroic tales has been maintained in the written works, and the authorship of anonymous heroic tales that hands down the transindividual memory of a community and cannot be regarded as individual creations. This research explains firstly the actualizing of the old material through contemporary literary methods in the written heroic epic, and secondly the view of the authors of the existing literary traditions.

研究分野：ドイツ中世英雄叙事詩

キーワード：ドイツ中世文学　英雄叙事詩　記憶　メディア　独文学

１．研究開始当初の背景

（１）研究対象の選定の根拠

本研究は、研究活動スタート支援（平成 23 年度～平成 24 年度、ただし平成 24 年度分は若手研究（B）を獲得したため辞退）「ドイツ英雄叙事詩に見る歴史意識―歴史的ディエトリーヒ叙事詩を中心に―」により着手した研究を、さらに拡大発展させるという構想のもとに開始されたものである。以下に、本研究に至った学術的背景について述べる。

書記機関によるラテン語の歴史叙述と、声の文化の領域での俗語で口伝される英雄詩という、歴史伝承を担っていた二つの文芸伝統は、折にふれて触れ合いながらも、別々の水脈を形成していた。しかし 13 世紀初頭に成立し、民族大移動期の史実に核を持つ英雄素詩材の書記文芸作品化の魁となった『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』（以下『哀歌』）の形成する複合体は、文字による歴史叙述と口誦の英雄詩を直接的な連関のうちに置き、統合する試みととらえうるものである。同複合体における文芸伝統の混淆の様相に関する分析は長らく私の研究テーマであり、2010 年の博士学位論文『「記憶」の変容 ―「ニーベルンゲンの歌」および「哀歌」に見る口承文芸と書記文芸の交差―』において、内容的には『ニーベルンゲンの歌』内部で完結している物語が、写本収録では何故『哀歌』との複合体という形をとる必要があったのか、また『ニーベルンゲンの歌』の口承性と『哀歌』の書記性はその際どのような役割を持つのかという問題を、両叙事詩の作品分析および口承文芸の持つ歴史伝承としての側面と合わせて論じている。

その結果として、『哀歌』での口承文芸伝統の源泉としてのラテン語による書記記録の仮構を通して、口承の伝統全体を書記文芸の伝統に内包される構図が描かれ、書記的な平面に導入された後も、英雄詩素材が歴史叙述と同等・同質の歴史性を持つ歴史伝承として受容されうるものとして演出されていることを明らかにし、そこに『ニーベルンゲンの歌』の『哀歌』との共同伝承の根拠を見た。そして、『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』の形成する複合体は、それまで口伝されてきた共同体にとっての記憶を、書記的平面においても歴史伝承として成立させるというコンセプトのもと構築されたとの解釈を導き、その際の論拠の一つを、両叙事詩が写本に収録される際に、詩形が異なるのにもかかわらず両者の移行部が目立たぬように視覚的な処理をされ、意図的な融合が図られていることに求めた。この論を通して、『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』の形成する複合体が、文字および声の両文化両領域における歴史伝承が交差する地点として位置づけられることを明らかにしたが、同複合体は、二つの異なる伝承の統合のいわば初期段階、出発点にあたるものである。そのため、平成 23 年度の研究活動スタート支援による研究では、両文芸伝統統合の全体像を明らかにするために、さらに同様の文学的事象を考察の対象と定め、『ニーベルンゲンの歌』および『哀歌』の影響下に 13 世紀末に成立した、東ゴート族のテオドリック大王の生涯とその事績から発祥した英雄ディートリヒ・フォン・ベルンの逃亡伝説を素材とする歴史的ディートリヒ叙事詩群に属する『ディートリヒの逃亡』の解釈、とりわけ同作品の冒頭に置かれている通称「系譜的前史」と呼ばれる箇所の分析を開始した。そしてその成果として得られた、声の文化の領域において記憶の伝承メディアと見なされている英雄詩が書記化された理由の一つとして、13 世紀における声から文字へのメディア的転換の結果として、口頭伝承の持つ歴史的信憑性が低下した可能性の想定をもとに、本研究では英雄詩を素材とする英雄叙事詩が、いかなる歴史的真実性ないし虚構性をもって受容者に認識されていたかを検証し、それによって英雄詩素材が書記文芸伝統との混淆を経て変質してゆく過程の考察を目標とした。その検証対象として、引き続きディートリヒ叙事詩およびテオドリック大王/ディートリヒ・フォン・ベルンに関する伝承を扱う諸作品を設定した上で、匿名により伝承されてきた英雄詩が書記文芸化された際に不可避的に生じる作品の「作者」とテクストの関係の問題について考察を行った。

（２）校訂テクストや研究文献を巡る状況

『ディートリヒの逃亡』については、長きにわたって校訂テクストがエルンスト・マルティンによる質的に問題があるもの（1866/1967）しか存在しなかった。しかし、ブレーメンのプロジェクトにより 2003 年の『ディートリヒの逃亡』を皮切りに新たな研究上のスタンダードとなる新校訂版が順次刊行され、それぞれの写本の伝えるテクストの特性について、詳細な比較研究が可能となり、それを受けてここ 10 年の間に次々と新たな視座によった研究が現れており、ドイツでのディートリヒ叙事詩研究は現在活況を呈している。とりわけこのプロジェクトを主導している E.リーネルトによる 2010 年の単著、『「歴史的」ディートリヒ叙事詩：『ディートリヒの逃亡』、『ラヴェンナの戦い』および『アルファルトの死』研究』は、歴史的ディートリヒ叙事詩に関する研究史上初の包括的な研究書であり、同書をきっかけに歴史的ディートリヒ叙事詩に関しての研究は新たな段階に入るものと考えられる。こうした研究状況に鑑み、写本間の差異の検証を基軸としたテクスト分析を行うことがまず当面の課題であった。その際、リーネルトが上掲書で今後の歴史的ディートリヒ叙事詩研究の基礎文献となるべきものの一つとして挙げており、『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』の構築する複合体と『ディートリヒの逃亡』

と『ラヴェンナの戦い』における英雄詩素材の持つ歴史性を直接的な主題とする C.クローピクによる研究書、『歴史的なるものの反映：中高ドイツ語英雄叙事詩の文学的構築について（2008）』や、書記化された英雄詩のジャンル帰属問題を扱う S.ケルトによる『後期英雄叙事詩におけるジャンル交差（2008）』、やはり直接的にディートリヒ叙事詩の歴史性を論じた F.クラーグルの『英雄詩の歴史性(2010)』『英雄時代(2013)』などの文献を参照し、ディートリヒ叙事詩におけるジャンルおよび作者の問題と口誦素材の書記化による歴史性の問題に焦点を当て、英雄詩の持つ意味の変遷に関しての通時的な視点の獲得を試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、声の文化の領域において過去の記憶を伝承するメディアであった英雄譚/英雄詩が、書記文芸の伝統と混淆されることを経てどのように変容していったかを、ドイツ中世英雄叙事詩にジャンルに属する諸作品において、通時的な時間軸上の幅を視野に入れ検証することを主たる目的とする。これは、記憶とメディアの関連性に関する文化史の一側面を、文芸作品に即して実証的に明らかにする試みである。本研究にあたっては、とりわけ①書記作品化された口誦素材の保持したないしは失った歴史性の問題、②共同体にとっての超個人的な記憶を伝承する英雄詩を素材とした作品の作者性の問題に関しての検証を主軸とした。

これらの主題を論じるにあたって、ドイツ語圏における両文芸伝統の交差の第一段階にあたる『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』の構築する複合体における英雄詩素材の書記文芸化の様相の再検証から出発し、おおよそ半世紀後にその影響下に成立した『ディートリヒの逃亡』と『ラヴェンナの戦い』との比較検証を行った。さらに、歴史叙述と英雄詩双方にまたがる存在である、テオドリック大王とその伝説化した形象であるディートリヒ・フォン・ベルンにおける、歴史叙述と英雄詩の間の齟齬それ自体を叙述対象としている『皇帝年代記』を参照に、書記と口承両メディアにおける歴史性の諸相を明らかにすることを目標とした。

３．研究の方法

以上の研究目的を遂行するために、まず『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』におけるメディア交差の様相に関してこれまで行ってきた解釈に関して再度精査を行った。その上で、先に言及したドイツにおけるディートリヒ叙事詩研究の新しいスタンダードとなると思われる二次文献を参考にしつつ、歴史的ディートリヒ叙事詩『ディートリヒの逃亡』の解釈を新校訂版に拠って行った。その際に、まず新校訂版の刊行により可能になった写本間の相違を検証するとともに、とりわけジャンル複合性が顕著な箇所であり、また写本収録上の大きな差異を有する、作品冒頭におかれた通称「系譜的前史」の解釈に重点を置き、英雄詩素材に対する同時代的認識を探った。なお、参考文献として使用したクラーグル『英雄時代』に関しては、新刊紹介原稿を西洋中世学会機関誌に掲載した。また、更なる二次文献および資料の収集を目的として数度にわたりドイツ・ミュンヘンに滞在し、主にミュンヘン・ルートヴィヒ・マクシミリアン大学の中世学学科図書館で作業を行った。それに加え、系譜的前史の大部分を欠く写本Ｗを所蔵するオーストリア国立図書館を訪問し、同写本を調査した。

また、中世盛期のドイツ語圏における歴史意識に関しての最新の研究動向を確認し、さらにその情報を日本国内のドイツ中世研究者へと提供する機会をつくるため、ドイツより上記の文献『歴史的なるものの反映』の著者である C.クローピク女史を招待し、国際コロキウム「ドイツ中世文芸における歴史性と虚構性」を企画、主宰した。

４．研究成果

（１）『ニーベルンゲンの歌』および『哀歌』における文芸伝統交差の解釈

博士論文での成果をより深化させ、とりわけ作品中にみえる英雄詩素材に由来する原始的英雄的世界の原理および「記憶」の伝承に関する論理と、中世宮廷およびキリスト教会のそれとの邂逅する箇所に関しての再検証を行い、英雄詩素材およびその歴史性に対する聖職者階級の立場からの認識を明らかにした。聖職者的視点から著されたと考えられている『哀歌』での叙述は、口伝の英雄詩の伝承の出発点に書記記録を仮構し、さらにその書記記録に記されたとされる「記憶」の成立過程を語ることにより、英雄伝承にある種の歴史性を認めたうえで、それに書記文芸的基盤を付与しつつも、「正しい」歴史は書記されたものにこそ伝承されているという機軸を打ち出していることを明らかにした。この検証により、13 世紀初頭時点での書記機関に属する存在の口承文芸の持つ歴史性に対する認識が明らかとなった。この研究成果を反映させたものとして、日本学術振興会の研究成果公開促進費の援助を受け、単著『「記憶」の変容』（多賀出版、2015）として出版した。

（２）『ディートリヒの逃亡』の解釈

ディートリヒ・フォン・ベルンの逃亡伝説を素材とする歴史的ディートリヒ叙事詩の中で、複合ジャンル的性質を示す作品である『ディートリヒの逃亡』に関し、以下の論点に中心とした解釈を行った。

①「系譜的前史」の構築する歴史構造の解釈

『ディートリヒの逃亡』の大きな特徴となっているのが、物語の主人公であるディート

リヒに至るまでの先祖 7 代の物語を語る、通称「系譜的前史」と呼ばれる長大なプロローグである。『ディートリヒの逃亡』は 10000 詩行超の作品であるが、この系譜的前史は実にその 4 分の 1 にあたる 2500 詩行に及ぶ長さを持つ。この規模自体が、系譜的前史が作品の本質に大きく関わっていることの証左である。この系譜的前史はローマ皇帝の年代記として描かれ、ディートリヒは正当なローマ皇帝の血統であることが示されるとともに、本来英雄一代の物語を語るため、本質的に通時的時間の幅を欠く英雄譚―ディートリヒを主人公とする諸作品においても、物語の時間的幅が彼の生涯を越える例はほかにない―に歴史叙述的文脈を設定する機能があることが推測される。

また、ディートリヒの先祖の大半は聖書的な長寿を誇る上、多くの子を残す生殖能力を具えており、この点で系譜的前史は明らかに創世記を想起させ、ディートリヒの祖先たちとユダヤの太祖たちを間テクスト的に結ぶ。それによって、系譜的前史の開始に位置するディートリヒの 7 世代前のディートワルトと彼の理想的宮廷が、過去は過去であるものの、非歴史的な過去のうちに置かれ、7 世代という隔たり以上に時間の彼方、あるいは時間の彼岸へと隔てられることとなっている。この解釈を通し、ディートリヒの先祖とそれに伴う理想的宮廷の非歴史化は、中世盛期の宮廷叙事詩がしばしば題材とした理想の騎士/宮廷の存在を、さらにユートピア的かつ非現実的なものとしているとことを明らかにした。これらの特徴はともに作品の想定している歴史認識と密接に関係していることには論を俟たない。この歴史観のもとでは、物語の進行とともに前述のように聖書の創世記との類似を通して非歴史化されているディートワルトの治める理想的世界と、ディートリヒの逃亡伝説に基づく物語が語られる世界の隔絶は先鋭化される。本研究は上述のような特徴を鍵に、ディートリヒの生きる時代の様相は相対的に歴史化され、受容者の現在と直接つながる地点に近づけられているとの解釈を試みた。

この系譜的前史に見られる歴史意識を、まずとりわけローマ史との関わりにおいて、ドイツ語圏初の俗語による年代記であり、前述のようにディートリヒに関する歴史叙述と英雄詩の間の齟齬を直接的に扱う『皇帝年代記』とともに論じ、西洋中世学会でのコロキウムで口頭発表した（平成 25 年 6 月 23 日、中央大学）。さらに書記文芸化を経た英雄詩素材の持つ歴史性をメインテーマとし、国際コロキウム「ドイツ中世文芸の歴史性と虚構性」（平成 27 年 3 月 19～20 日、慶應義塾大学）を主宰し、口頭発表を行った上で国内外の中世研究者との意見交換を行った。

②作者性の問題

過去の史実から発祥した口誦の英雄詩は、共同体にとっての偉大な王や戦士たちの記憶を伝承するメディアであり、ゆえにそこに語られていることは個人の創作に帰せられるべき性質のものではなかった。それを反映し、英雄詩を紡いだ存在は自己を長い伝統の一部と理解しており、その名を明かすことはない。この匿名性や、口承的な受容を前提とした詩節形式などは英雄詩の書記文芸化であるドイツ中世の英雄叙事詩にも受け継がれ、英雄叙事詩におけるジャンル要件となっている。しかし、中世盛期の英雄叙事詩はすべからくある個的な創作意志による英雄素材の文芸化であり、そこには不可避的に個人の作者の存在と、その作品における作者性の問題が浮かびあがるが、中世の文芸作品における「作者性」のあり様は、ジャンルに応じて多様性を見せる。そして、『ディートリヒの逃亡』は、英雄詩素材を扱うという点において英雄叙事詩にカテゴライズされる作品であるものの、前述した歴史叙述に接近している系譜的前史を始めとして、宮廷叙事詩と共通する二行押韻の形式を持つなど、複数の文芸ジャンルの特徴を内包する作品として詩作されており、さらにまさに英雄詩を素材とする作品としては例外的に、ある固有の名前と結び付けられている。こうした複合ジャンル性は、『ディートリヒの逃亡』という一つの作品の中にあって複数の「作者性」のありようが混在していることを暗示している。このジャンル交差の「さじ加減」においてこそ、『ディートリヒの逃亡』の「作者」がテクストに対しての発揮する「作者性」は明瞭な形で表出していると考えられる。

以上の視点をもとに、『ディートリヒの逃亡』の作者の問題に関しては、まず口頭発表（第 3 回中世コロキウム、平成 25 年 2 月 23 日、慶應義塾大学）を行い、そこでの反響および議論をもとに研究を継続した。その過程で新たに中世文芸における作者の「名前」の問題に関する知見を深めるための研究を開始し、その成果をやはり口頭発表（日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム、平成 26 年 10 月 11 日、京都府立大学）し、これらの成果を論文にまとめた（『ディートリヒの逃亡』における「作者」像―ジャンル交差の諸相から、『詩・言語』第 81 号、2015 年、印刷中）。

③写本間の異同の問題

①で述べたように、『ディートリヒの逃亡』の持つ歴史構造に関し決定的な役割を果たしているのが系譜的前史だが、現存する写本 R（ベルリン州立図書館蔵）、写本 W（ウィーン国立図書館蔵）、写本 P（ハイデルベルク大学図書館蔵）、写本 A（通称アンブラス英雄本、ウィーン国立図書館蔵）の間には系譜的前史の箇所にのみ伝承上の大きな相違が存在する。すなわち、写本 P および A がディートリヒの先祖 7 代（ディートワルト、ジゲヘール、オルトニート、ヴォルフディートリヒ、フゲ

ディートリヒ、アメルンク、ディートマル）の事績を語るのに対し、写本RおよびWはヴォルフディートリヒ以降の4代分しか収録していない。この写本RおよびWにおけるディートワルトからオルトニートまでの系譜に関する記述の不在の理由として、写本RおよびWが典拠した写本が成立した段階で、この系譜的前史と内容が重複する別の英雄叙事詩『オルトニート』及び『ヴォルフディートリヒ』と差し替えられ、それによって『オルトニート』『ヴォルフディートリヒ』『ディエトリーヒの逃亡』『ラヴェンナの戦い』という幅の広い系譜的連続性を念頭に置いたチクルスが意図された可能性を従来の研究は推測している。その際に前提となっているのは、写本PおよびAに収録されている、ディートワルトに始まる7世代の系譜を語るヴァージョンが『ディエトリーヒの逃亡』成立当時の姿であろうという認識である。

しかし、もし『オルトニート』および『ヴォルフディエトリーヒ』による差し替えが意図されていたとしても、この『ディートリヒの逃亡』という作品以外には伝えられていないディートワルトおよびジゲヘールの世代の物語―ゆえにそれは『ディートリヒの逃亡』の作者による純粋な創作の蓋然性が高い―は補完されない。そのため、写本RおよびW ではディートワルトから途切れることなく続くローマ皇帝位の連続性よりも、オルトニートの死で一度断絶し、ヴォルフディエトリーヒの世代から新たに始まる直接的な自然の摂理に従った、個人間の関連すなわち「血」の連続性が重視されたものと考えられる。制度的なるものと血族的なるもののどちらに重きを置くかという、写本間で揺れを見せるこの問題の背景には、歴史叙述的な原理と英雄詩的な原理の相克が透けて見えてくる。そして、まさにディートワルトとジゲヘールの世代の物語は、受容者が「聞いたことがない」、すなわち英雄詩の原理にのっとった歴史的信憑性を確保し得ないために、その過度なユートピア的・非現実的な内容とも相まって、削除の対象となったのではないかという仮説に結びつく。

この視点に立った写本RおよびWでの「系譜的前史」の大幅な省略の理由についての解釈を中心とし、そこにあらわれてくる英雄叙事詩の持つ歴史性について論文を執筆し、現在査読中である。

（３）その他の研究成果

当研究を行う過程で、近代以降の中世英雄叙事詩の受容についての研究を並行して行っており、その成果は一冊の共著（『カタストロフィと人文学』、勁草書房、2014 年）および口頭発表（日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム、平成 24 年 10 月 13 日、中央大学）および論文（日本独文学会研究叢書 094 号、2013 年）にまとめた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① 山本潤、「ディートリヒの逃亡」における「作者」像―ジャンル交差の諸相から、『詩・言語』第 81 号（2015）、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会、査読有り、印刷中

② 山本潤、トーマス・クリングと中世　―オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタインとの関わりから、日本独文学会研究叢書 094 号「文化史・文学史からみたトーマス・クリング」、査読無し、5-22 頁、2013 年

〔学会発表〕（計　5 件）

① 山本潤、Geschichtskonzept in der genealogischen Vorgeschichte von „Dietrichs Flucht“、第五回中世コロキウム「ドイツ中世文芸における歴史性と虚構性」、2015 年 3 月 20 日、慶應義塾大学（東京都・港区）

② 山本潤、名前と作者　―中世俗語文芸における作者性、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「名前の詩学―文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題」、2014 年 10 月 11 日、京都府立大学（京都府・京都市）

③ 山本潤、中世ドイツ文学に見るローマ観―『ディエトリーヒの逃亡』『皇帝年代記』および『モーリッツ・フォン・クラウーン』を題材に―、西洋中世学会第 5 回大会シンポジウム「中世のなかの「ローマ」」、2013 年 6 月 23 日、中央大学（東京都・八王子市）

④ 山本潤、Autorschaft in „Dietrichs Flucht“ – Selbstsnennung, laudatio temporis acti und kollektives Gedächtnis、第 3 回中世コロキウム『中世文学における経験、ファンタジー、詩作』、2013 年 2 月 23 日、慶應義塾大学（東京都・港区）

⑤ 山本潤、トーマス・クリングの中世への視線―„wolkenstein. mobilisierun ’“ を巡って、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「文学史・文化史からみたトーマス・クリング」、2012 年 10 月 13 日、中央大学（東京都・八王子市）

〔図書〕（計　2 件）

① 山本潤、「記憶」の変容―『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』にみる口承文芸と書記文芸の交差、多賀出版、2015、総 294 頁

② 西山雄二（編）、ミシェル・ドゥルギー/ジャン=リュック・ナンシー/ジゼル・ベルク

マン/野本弘幸/左古輝人/綾部真雄/高桑文子/荒木典子/山本潤/赤塚若樹/大杉重男/寺本成彦/寺本弘子著、カタストロフィと人文学、勁草書房、2014、320（221-245）頁

〔その他〕
ホームページ等

① 山本潤、新刊紹介「Florian KRAGL, Heldenzeit: Interpretationen zur Dietrichepik des 13. bis 16. Jahrhundert」、『西洋中世研究』No.5、2012、219(182-183)頁

② 国際コロキウム「ドイツ中世文芸における歴史性と虚構性」、2015年3月20日、慶應義塾大学を主宰

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　潤　　（YAMAMOTO JUN）
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：50613098